



→久しぶりに下りた矢切には二艘の舟が出ていた。気温は30℃を越えそうないきおい。あんまり暑くてもダメ、寒くてもダメ。いいくらいがいい。

↑矢切の渡し場にケヤキの木がある。これは紅葉ではない。枯葉だ。葉がこすれて枯れている。でも150m離れた川向こうの東京から来た人は、これをきれいという。

ツクツクボウシ鳴く。アマガエルが鳴いている。今日は初夏のような一日。子どもたちがドンドンカラカラドンカラカラとリズムを刻む太鼓の音が遠くから聞こえてくる。秋は村祭りの季節。ちかごろは土日開催なのだろう。

東京歩こう会の幟をたてた行列が江戸川の土手を越えて渡し場に向かう。その数六十余名。まるでアリのようだ。

すぐそこまで、なにか近づいてきているが、それがなにかわからない。秋はそういうものなのだろうか。

お婆ちゃんとしていた女の子が、弁当を食べながら逃げまわっている。

「どうしたの？」

「ハチ」

見ると、このまえまでアブラゼミたちの恋のささやき場になっていたクルミの木のみまわりを、アシナガバチたちが飛びまわっている。

ハチたちはもう巣作りを終え、これから冬眠にでもはいるうとしていいるのだろうか。しきりに木の洞を探しているように見える。越冬場を探している。

渡し場の竹藪からモズの鋭い縄張り宣言が聞こえてくる。それは山に冬の訪れが近いことを教えてくれる。

## 今週のクマ

→相手にしてもらえなくて、ふてくされたクマは、目だけ動かしてこちらを見ていた。おおちゃくもの。といったってクマの勝手でしょといわれそう。



↑大きくふくらんだ腹。水辺のカマキリで思い出すのはハリガネムシに体を乗っ取られて誘導されること。このカマキリはどうすんだらう。

頭上をノスリが悠然と舞っている。この次期が野ネズミなどを発見するのに、いちばんいい。稲刈りが終わり、草が枯れて、下の生き物たちの行動がよく見えるからだ。ここはかっこうの狩り場。刈り残された一枚の田んぼの稲は、無惨な姿をさらしている。ここは餌場か。

矢切の畑は、一年のうちでこの時期がいちばん変化が激しい。大きく腹をふくらませたカマキリがのそりのそりと歩いている。

「ことしは……と、どこに卵を産みつけようかな」

とでも考えながら、産卵場を求めて歩いているのだろうか。

今年は二度も江戸川が氾濫した。カマキリは、産卵後の雪の深さや洪水を予測して産卵場を決めるという。

一年生の生き物たちは、子孫を残すために、ありったけの知恵をしぼって死んでゆく。多年生の生き物たちは、ありったけの知恵で生き残ろうとしている。

人のように、そこにいれば温々と命をつなぐことができるなら、そう真剣になることもないだろうにな、とおもわず生き物たちに同情してしまおう。

矢切の秋の一日。